

現生人類は生物としてホモ・サピエンス（知恵のある人間）と命名されているが、フランスの学者H・ベルクソンは人間が道具を製造する能力に着目してホモ・ファールベル（製造する人間）という名前を提唱している。刃物はメスにもドスにもなるように、この特徴は社会を発展させてきた一方、それ以前の自然環境や社会構造を破綻させる原因ともなってきた。

アメリカの化学者T・ミジリーは一九二八年に冷媒となるフロン（日本ではフロン）を発明した。これは理想の冷媒として、急速に世界に浸透した。ところが一九七〇年代になり、地球の上空で宇宙からの紫外線の入射を防止しているオゾン層をフロンが破壊することが解明され、一気に悪者になってしまった。

自動車は世界に一五億台以上が普及しており、この輸送手段が存在しなければ、人間の移動はともかく貨物の末端の流通は維持できない。その一方、世界では自動車事故により毎年一三〇万人以上が死亡している。朝鮮戦争で戦死した人数が年間で一七五万人であったから、自動車戦争という言葉は誇張ではない。

情報社会は九〇年代初期に一般に開放されたインターネットにより劇的に発展し、現在では世界の七割程度の人々が利用する通信手段となっている。その社会への浸透速度は固定電話を世界の二〇%の人々が利用するまでに一二年、携帯電話は五六年が必要であったが、インターネットは一八年でしかないことが証明している。

しかし、あらゆる技術と同様にインターネットも利点だけではない。迷惑メールと総称される不要なメールが大量に往来し、現在では通信全体の半分程度になっている。不要な広告という程度であれば自動削除で対応できるが、最近登場した問題はエコチェンバー、フィルターバブル、サイバースケードである。

エコチェンバーは特定の信条や価値を共有する人々の内部のみで情報が交換されて増幅し、それ以外が排除される現象で、二年前の一月に退任直前のトランプ大統領を支持する人々が連邦議会議事堂へ侵入した事件が一例であるし、日本でも新型コロナウイルスのワクチン接種に反対する人々の増加の原因となっている。

フィルターバブルは情報提供組織が個別の人間の検索履歴を解析し、関心がある情報を優先して提供するため、特定の情報を信用する傾向になる現象であり、サイバースケードは特定のサイトの見解に同調する人々が集合し、極端な世論が突出する現象である。新聞など既存の媒体でも類似の傾向はあるが、それが極端になるのがサイバースケードである。

このような社会事件はインターネット時代以前から何度も発生している。昭和四〇年代の石油危機で噂話からトレットペーパーが不足した事件は過去のことのようにであるが、今回の新型コロナウイルス流行の渦中でも、トレットペーパーは中国で生産されているので不足するという噂話から品切れになった事件が発生している。

しかし、世界で六〇%、日本で八〇%の人々が利用するインターネット空間で発生する噂話は浸透の速度でも規模でも従来とは桁違いであり、前述のようにアメリカでは議会が占拠される革命のような事件さえ発生する。これを防御する基本は個人の情報リテラシーの向上であり、その教育が必須の時代である。